

等夜の野に兎狙はり

渡部和雄

—

三五二九 等夜乃野尔 平佐芸祢良波里 平佐乎左毛 祢奈敞古由惠尔 波伴尔許呂波要

初句「等夜乃野」について、「隠れていて獣をとる所」(真渕)と考えると一般的になってしまふので『古典文学全集』の地名欄にはない。ここでは一応地名のように取扱う。『新古典文学全集』には地名欄にみられる。

・神奈川県津久井郡津久井町鳥屋に擬する説がある。

・下總国印旛郡鳥矢郷。(和名抄・古義)

・西群馬郡白井の辺りにて等夜乃渡、と云もあり、(橋本『歌解』)

・トヤという地名は紀伊・出雲・陸奥・陸中にあり、越後に鳥屋野、岩代に鳥谷野の地がある。(鴻巣『全釈』)

・流布本和名抄の下總国印旛郡鳥矢郷は高山寺本には鳴矢とあるが、若し鳥矢を正しとすれば或は其地の野をいふのかも知れぬ。岩代信夫郡杉妻村大字鳥谷野は続古今に「みちのくの信夫の鷹の鳥屋ごもりかりにもしらし思ふころは」(九七一・中務卿親王)と詠まれた歌と関係があるやうであるが、若し旧地名であったとすれば、此国の歌で

もあり得る。(松岡『論究』)

『地名辞書』をあげてみると、

・(日理郷) 和名抄・印旛郡巨理郷、今曰井町なるべしと云ふ。即ち物部郷の北、鳴矢郷の西にして、印旛湖、及び鹿島江に沿へり、日理とは其湖津の義に因る。

右様の「鳥矢郷」「日理」(ワタリ・サワタリ)について詳細に調査された高橋光広代の『「左和多里」考』という著作がある。

・下總国印旛郡鳥矢郷 「鳥矢郷」そのものに問題がある。『和名抄』の刊本には「鳥矢」とあり、高山寺本には「鳴矢」とある。またある本によっては「島矢」ともある。とすれば、一概に「トヤノ」に相当する地とは言えないのではなからうか。……現代の地名に「トヤノ」という地はないのである。

と疑問をのべられている。『地理志料』ではそこを、刊本では「鳥矢」であるが高山寺本の「鳴矢」によってカブラギ(鐮木)として内郷村のあたりとしている。(旧佐倉町内)

三五七五 美夜自呂のすかへに立てるかほが花な咲き出でそねこめて偲はむ

の「美夜自呂」を『万葉地理考』(豊田)では岩代国信夫郡に宮城村あり、この地にあらざるか、という。

右の「左和多里考」では福島市宮代。信夫郡家、石背国府の可能性を低くはないとされる。

東歌というのは国府に関係が深いように思われ、参考までにあげる。

『常陸風土記』の上方、東海道の道の奥に〈みちのおく〉というものがあつた。

六五三年 常陸国北部を多珂郡と石城郡に分ける。七〇九年石城を磐城に改める。

支配は支配を増幅する性質がある。

七一八年 石城国・石背国が置かれる。

七一九年 石城国に駅家十ヶ所が置かれる。

菊田、磐城、広野、榎葉、標葉、多珂、真野、仲村、坂本、巨理

ワタリで一応止まっているのは阿武隈川が石城国（と石背国）の目安としてあつたことが推測される。そこに「逢隈関」があつて、対岸に「玉前駅」があることになる。で、

八一一年 石城の駅家が廃止され、常陸国より長有・高野經由で白川郡に入ることになる。

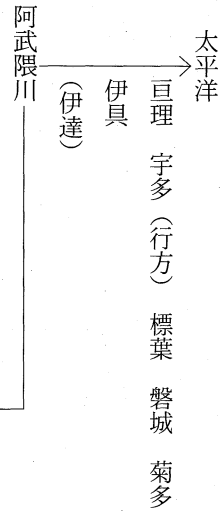
即ち「陸奥国」は山道を通るのが一般的になった。七二四年に多賀城が作られていて、「陸奥鎮所」となり、国府的役割を持ち、先の石城、石背二国はこの陸奥国に解消した。

「石背国」（山道） 駅家は、

雄野、松田、磐瀬、葦屋、安達、湯日、岑越、伊達、篤借

〔篤借〕は白石市越河。ここでのワタリは信夫郡、あの阿武隈川に沿っている。

この二国郡と阿武隈川の関係を簡略にみると、



こうして阿武隈川から疎外されているのは会津と柴田である。行方と伊達を除いて五郡対の型に並んでいる。菊田の上、「磐城」と「磐瀬」(イワセ)が対に並んでいる。それと磐城国と磐背国は似ていないだろうか。

柴田から荊田、会津から耶麻、そして行方は常陸国に存在している。

「陸奥国」の基礎的な形は海道、山道并わせて阿武隈川内の辺りにあったのではないか。

で、その阿武隈川の限る所、阿武隈高地の北限に三つの山がある。大森山、烏鳥屋山、七峰山という。烏鳥屋山はカラストヤ山。ここではカラスの巣と山、カラスの棲んでいる山であろう。トヤはカラスの棲処・巣である。

七二八(神龜五年) 陸奥国請新置白河軍団又改丹取軍団為玉作軍団 並許之とみられるので同じ頃「石城軍団」があってもいいことになる。

侵略軍が駐屯し、現地人を徴集訓練して軍事力となる。侵略、征服の増大につれて「陸奥鎮所」が多分各所にできることになる。それと一体的に行政府も作られて行く。

海道を歩いて来た目には陸奥山道は暗い。光度が落ちる。カメラで試してみるとよく判る。

安太多良の空の色も暗かった

会津嶺の湖の色も暗かった

信夫の文学摺りの色も暗かった

道の奥というのはすべて暗かった

〈暗い〉というのは何かの意味を示している。アテネからデルポイに向かう途中にリヴァディアという所があり、ここにトロポニオスの神託所がある。(ヘロドトス)

神託所は洞窟の中にあつて、神託をうける者は洞窟をおりていって忘却(レエテ)の泉の水を飲み、神託を伺つて、帰りは記憶(ムネモシユネ)の泉の水を飲まなければならない。

これをイメージ、あるいは想起(ムネモシユネ)してみると、洞窟はU字型になつていて、暗く冷たい坂道を下りて行く。忘却の泉に到つてこれまでの生活性の一切を忘れ去らなければならない。底辺(神託所)で神の言葉を聞く。これは異質的通化である。で反対側の上り道で想起の泉を飲まなければならない。地上に戻つてから記憶されることは別なことである。それが神託の意味である。以後、人生で記憶されることは社会、国家、歴史には存在しないものについてであらう。

さて、そこから「ソクラテスはデルポイへいった」(ギリシャ哲学者列伝)。デルポイ神殿の破風には「汝自身を知れ」と刻まれていた。それをくぐつて至聖所に到る。巫女が三脚台に坐つて神の声を聞く所。

三脚台の下には大地が裂け、底から煙がゆらぎのぼっている。大地の子宮から立ちのぼる霞。巫女は地底から神の呟きを聞く。

といつて旅行者や学者がトロポニオスを訪ねても、デルポイを訪ねても、二つの洞窟の聖泉も噴煙をあげる大地の裂け目も見つからないだろう。これはイメージ・想起なのである。ギリシャではその想起を言葉(文)にした。哲学、

悲劇を語るのが大きく文学というものである。想起（記憶）というのは言葉なのである。

「ギリシャでいちばん美しいところの一つ」とフローベル風に言ってみる。あるいはソクラテス風に、それから人間が始まった。即ち死から生、新生・復活の構図であった。

皇化された国々は言葉、習俗、宗教を失う。大国に民主化された国々は言葉、習俗、宗教を失う。

千年を経、二千年を経て人は神話を読み、秘儀に参入することなるはずのところ日本には、そんな〈個性化〉などは存在しない。

国家には、民主主義には永遠に失われてしまったものがある。いえ、社会は常時、不断に失いつづけている。

「それは文字の読める人間同士が僧院で用いていたラテン語ではなかったし、あの地方の土地の言葉でもなかったし、またそれまでに私が耳にしたどの土地の話し言葉とも異っていた。……サルヴァトーレはすべての土地の言葉を話していたのであり、またどこの土地の言葉も話していなかったのだ。」

というのは『バラの名前』に出てくる修道士であるが、〈比較言語学〉などよりもっと土着直接的な生々しさに於て秘儀が成立し、人間は個性化されると考える人も日本にはない。

〈言葉は神であった〉という表現は歴史化している。民主化した国民が永遠に失われた言葉を探すことはない。すべての土地の言葉はラテン語ではないし、ラテン語はすべての土地の言葉にはならない。

秘儀の神殿は地下に隠される。

皇化され、グローバル化された国で永遠に失われてしまったものを求めて比較言語学（方言学）を研究した者がありえたらうか。

永遠に失ってしまった、青春の郷愁を〈秘儀〉とイメージして、そこへ参入（降下）し、異教的靈性を獲得しよう

として、〈神が言葉になった〉時、また民主的歴史がはじまる。

イエスはいつでも異教人ではかありえない。

しかし、国家と文化と言語がそのことに気づくことはない。言語が証言できる〈永遠の喪失・青春の郷愁〉などあるわけがない。

人はその正義（伝統）を武力によってだけ認識する。みちのくの言葉・異教神のけはいを垣間みる能力を人間は持てない。

「あの獣みたいな修道僧は何者なのか？ バベルの言葉を話すあの男は？」
そう、異端としてアヴィニヨンに送られる。

〈土地の言葉〉は歴史にならない。

昔、修道院で文書の採集が行われた。

イエスには、神の子には、〈笑の言葉〉、〈歌の言葉〉、〈スポーツの言葉〉などなかった。

文学館に、ある哲学者の〈笑いについて〉という文書が購入される時、何が起るのか。

〈笑い〉は集団に属している。

「何由以、天宇受売は楽を為、亦八百万の神も諸咲へる」

「ああ　しやごしや　此は嘲笑ふぞ」

「楽（あそび）」「咲（わらい）」が伴にある。

暗さが明るさに侵略される時、ひとりが集団化する時、支配と被支配の国家化の時、〈笑い〉が利用される。外交より歌が先行する効果があったり、戦争の勝敗の代りにスポーツが役立つことがある国際社会もあろう。「そして清貧

とは宮殿を所有するか所有しないかではなく、俗世の事物に法を定める権利を保持するか放棄するかを意味している。」

王系が消えるような暗い話。王室の法典を検討する委員会。歴史に子孫を残さない話。そんなことを話しながら生きていく人生。

『土』という小説があった。「そしてともかく、そこになにより濃い深い真の闇があった。」(『ブリューゲルへの旅』中野孝次)

「ここには民衆の最後の武器である笑いと諷刺があるのである。」(『暗い絵』野間宏)などと他人の言葉を書いてみるのもいい。そんな気安めを他人が言っている間に、すべて〈明なるもの〉、皇軍の侵略は〈暗いもの〉への裏切りとして秩序・国家を形成する。国語・国文学者が一つの論文というものを書くこと百の言葉が失われきりになるようなものである。

この地球上では二週間に一つ言語が消失する。言葉は神であって以来、国家は神を失いつつ成長する。明言は闇黒を失った。

七〇九年 陸奥・越後二国の蝦夷、良民を害す。遠江・駿河・甲斐・信濃・上野・越前・越中等の民を徴発し、陸奥鎮東將軍巨勢麻呂、征越後蝦夷將軍佐伯石湯らこれを鎮定。

七二〇年 蝦夷反乱、按察使上毛野広人を殺害。持節征夷將軍多治比島守、兵一万を動員して、これを討つ。

七二四年 海道(牡鹿)方面の蝦夷反乱、国の大掾を殺す。持節大將軍藤原宇合これを平定。

皇軍は正義の構造を持っている。故に正義以外のものは表現されない。人は日本歴史というものに驚愕し、身ぶるいすることはない。

それは天照大御神の子孫の天皇の軍隊の行動だからであり、「大君の命畏しみ」出兵する持節大將軍の行動だからである。

日本歴史を読む国民も天照らす陽光を背に受けて、背光と共に歴史表現を読む。存在が揺るぎ、目がくらむほどのことはない。皇化・光化が行き渡った島国だからだろう。

反乱のきざしがある

武器を隠している

ナラズ者の群れ

という皇化精神から出て、平定の皇化に到る日本史の自同的正義。皇化、光化、グローバル化の、同一性正義の中に国民も歴史学者も心豊かに暮している。

殺人を正義化できる論理。その論理で歴史が作られている。歴史の教科書には正義以外のものは何一つはめ込まれていない。言語表現、文章表現に正義以外のものは何一つ含まれないと同様である。人が正義を話す習性をもってしか生きられないのは、そう本性の喪失ではないのか。

歴史は〈想起〉というか、記憶にならない。それで人は〈死ぬ〉ことができるのだろう。それで死は大国の（属国の）正義なのだろう。

大国が殺してくれるから、人は死を考えることができる。そうか想起は山ほどある。想起というのは一つの世界なのである。

『国造本紀』にみられる国造を陸奥国にあてはめてみると、

道奥菊田国造(菊田)、阿尺国造(安積)、思国造(巨理)、伊久国造(伊具)、染羽国造(標葉)、浮田国造(宇多)、信夫国造(信夫)、白河国造(白河)、石背国造(磐瀬)、石城国造(磐城)の十国造である。

というのは『みちのくの古代史』(大塚徳郎)である。

「会津」は入っていない。『左和多里考』(高橋光広)は「阿尺」の次の「思」を「相津」にすると並びがよくなるようだという。

「石背国造」がイワセである。安達郡に「岩代町」がある。少し前までは磐梯熱海駅は「イワシロアタミ」であった。会津から塩原方面への鉄道を「野―岩線」と呼んでいた。

とにかくこれらの国々に石城海道駅、石背山道駅が置かれ、多賀城国府に到って、ついには大陸奥国に統合される。天応二年(七八二)六月十七日、大伴家持が陸奥国按察使兼鎮守將軍に任ぜられている。どの道を通ったかは判らないが石背山道を通れば「岩代国信夫郡杉妻村鳥谷野」を通ることになる。加えて家持自らが採録した防人の姓(名)に似た名前に多く出会ふことになる。

防人歌作者の姓名。

四三二二 山名郡 丈部真磨 遠江国

四三二四 同郡 丈部川相

〃

四三二五 佐野郡 丈部黒當

〃

四三二八 助丁丈部造人麿 相模国

四三四一 丈部足麿 駿河国

四三四六 丈部稲麿

〃

四三五二 天羽郡 丈部鳥 上総国

四五五四 長狭郡 丈部与呂麿

〃

四三五五 武射郡 丈部山代

〃

四三八三 塩屋郡 丈部足人 下野国

四三八九 印波郡 丈部直大麿 下総国

これらの防人歌は天平勝宝七歳(七五五)に採録されたものである。

平安朝になって郡司の氏姓が判してくると「丈部」は「遠江以東、関東地方に特に多く、関東地方では郡司級のものがこの系統から多く出ていることを示している。」(『みちのくの古代史』)

「磐城・標葉・白河・磐瀬・安積・信夫・会津・耶麻諸郡では、すなわち現在の福島県内に入る大部分の郡では、郡司級がこの系統のものである。さらに、柴田・伊具・邑麻の諸郡でも郡司級の者がいるので、丈部の存在している郡では、大部分はこの系統の者が郡司になっているといえることができる。」(『右同』)

先の国造からこの郡司へはどう考えればいいのか。例えば、

丈部山際 於保磐城臣

丈部賀例努 阿倍陸奥臣

丈部直繼足 阿部安積臣

丈部大庭 阿部信夫臣

丈部庭虫 阿部会津臣

丈部嶋足 安倍柴田臣

「丈部」出身—阿部氏經由—国造(臣)

という型になっている。旧国造が一旦、宮廷御用達(丈部)の形式をとらされて、それを統括した、棟梁阿部氏によって郡司に位置づけ、推薦された?

侵略・支配—皇化適応—郡司

大伴部から大伴白河連、大伴柴田臣

吉弥侯部から上毛野鋏山公、磐瀬朝臣

丸子部から大伴安積連、大伴山田連

などの形は大氏族の推挙があったことが推測される。皇化し大氏族—郡司の同質性である。

この人間の育ち様、皇化生涯というのは随分奇妙なものに思われる。人間が生きているのではなく、皇化の歴史が生きているのである。

最初の、「蝦夷の魁師綾糟」の服属盟誓。「臣等蝦夷、今より以後子子孫孫、清き明き心を用て、天闕に事へ奉らむ。臣等、若し盟に違はば、天地の諸の神及び天皇の靈、臣が種を絶滅えむ」とまうす。(敏達十年)

という誓詞は、大王の綾糟への呪詛(詔)の構造ではないか、というのが『古代東北と王権』(中路正恒)の面白い表現である。

「そして、敏達の詔のその言葉を受けて、役人は、「臣等蝦夷、今より以後子子孫孫……」と、「爾」を「臣」に換え、またみずからの服従の誓約となるように文言を少し変え、それを綾糟らに、口移しに語るように指示したのではないだろうか。」

という。多分、蝦夷が大王の言葉を語ることが服属なのであろう。

エミシは無数の言葉を失った。

エミシは無数のカミを失った。

エミシは無数の生物を失った。

エミシは無数の〈小さき者〉を失った。

というよりは、大王の国が殆ど無限の言葉を失ったのであろう。征服というのは小さき者（神・言葉）を永遠に失うことである。

グローバル、民主、自由、文明は人がひたすら貧しくなることでもあるらしい。

もう一つは北（みちのく）の地名と南の地名との類似関係がある。

巨理郡望陀郷―上総国望陀郡

行方郡―常陸国行方郡

行方郡多珂郷―常陸国多珂郡

宮城・名取・桃生郡磐城郷―磐城郡

牝鹿郡加美郷―武蔵国加美郡

黒川郡白川郷―白河郡

加美郡—武蔵国加美郡

加美郡磐瀬郷—磐瀬郡

小田郡加美郷—武蔵国加美郡

邑麻郡相模郷—相模国

邑麻郡安蘇郷—下野国安蘇郡

志田郡(信太郷)—常陸国信太郡

玉造郡信太郷—常陸国信太郡

玉造郡(玉造郷)—下總国匝瑳郡、植生郡玉作郷

などの直接の關係は判らないが故里を連れて移住したり、故里の名前をつけることもあったであろう。この「ゴチャマゼ」は足柄峠の東である。底辺は似ているだろう。

七二五年 東国の富民千戸を陸奥に配す

というのは海道は常陸国から、山道は下野国からか。この二国と福島県を併わせると特徴のある方言圏ができる。

七二二年 諸国から千人の柵戸を陸奥鎮所に配す

というのは多賀城(国府)のことであろう。諸国というのは海道は箱根から東、山道は信濃から東の国々であろう。このいわゆる東国と現東北は言葉の性質が似ている。漱石ではないが西国とは言葉の性質が異なる。

朝廷や日本の歴史記述は異質(多様)性の記述ができない。

七〇八年 陸奥と越後の蝦夷、野心馴れがたく、しばしば良民を害する

七五八年 すべて新米、まことにいまだ安堵せず、また夷性狼心、なお、あらかじめ疑多し

〈蝦夷〉というも、〈野心馴れがたく〉というも、ただ皇化という視点から一元化、同一化に向いているだけである。

「新米」「安堵せず」「夷性狼心」もひたすら同一表現である。で、

夷俘等たちまち逆心を発し、桃生城を侵す」と続く「逆心」は皇化への反逆心であり、それが桃生城を侵すというのは「夷俘」と主語が置かれた時から決められていた。文脈と語句の同一性、自同性言語表現。で、

坂東騎兵・鎮兵・役夫および夷俘等を徴発して、桃生・小勝柵を築かしむ

皇化のため、民主主義国家のため言語は正義同一表現、勝利同一表現となる。

七九八年 相模・武蔵・常陸・上野・下野・出雲等の国に勅して帰降夷俘に……撫恤を加え……
という国々が先の「諸国」なのだろうか。

自己同一性表現というのは結果であるものが始発となる表現でもある。「夷性狼心」の「蝦夷」を攻略し、センメツし、皇化するのである。始めから終わりまで正義がでてくる金時アメのようなものである。

被占領というのは人間の存在論的悲劇かも知れない。しかしそれによって地上の国々は本質的に人間の知性を獲得してきた。それは無数の失われたものを代償としている。

属国民は主大国の言語を習得する。その習得は主国への隷従の性質を持つ。国司の館での宴会で、大和形式の歌を歌わされた。これは服属関係の儀礼であった。

三四四一 ま遠くの雲居に見ゆる妹が家にいつか到らむ歩め吾が駒

柿本朝臣人麿の歌集に曰はく、遠くして、又曰はく、歩め黒駒

などは地方官達の手本の歌なのであろう。人麿歌集の歌を歌ったわけではなく、自分の知っている人麿の歌を歌ってみせたのであろう。

こうしてとにかく歌が成立し、各国は行政と文化が統一的に整備され、無数の言葉や歌がその土地から失われる。グローバル化は水道の水みたいに、医者の数値みたいに、人間を改良した。

四

岩代国信夫郡杉妻村大字鳥谷野（福島市鳥谷野）

先の『万葉集論究』（松岡静雄）にみられた右の地名は『左和多里』考』では「地名辞書に引用されているのを、そのまま借用したことと思われるが、鳥屋＝鳥谷野、なるかどうかは、今の私には徴するすべがない。……私にはどうやら、「等夜乃野」は「鳥谷野」の野と断定してよいのではなからうか、と思われる。」という。

もう一回駅家をあげてみると、

磐山 瀬上、余目、飯坂？

岑越 福島市街地（信夫山南側）？

伊達 桑折町付近？

「志乃不国分爲伊達郡」（和名抄）

駅家は「岑越」ということになる。

一応の目安に『福島県史』をあげてみると、「このころ陸奥国の国府がどこにあったかはわからない。天平の初年ころ（七二九―四八）までには、国府は多賀城に移ったらしい。それ以前には名取鎮所にあったという。名取郡がおかれたのは和銅六年（七二三）であるからさらにその前の国府は、国府台の伝説がある福島市瀬上の宮代付近であろう

かという説が信じられたことがあり、さらに信夫国府の前には郡山市方八町の地が、初期の陸奥国の国府の役を果たしたのではないかという推論をなすものがあるが確かな根拠はない。」

六四五 郡山市大槻近辺

信夫郡宮代に移る

七二三 名取（岩沼市）に移る

七二八 石城国府は磐城郡（旧平市）

石背国府は信夫郡（福島市瀬上）

七二四 多賀城（石城・石背解消）

瀬上とすれば駅家は磐山？

とにもかくにも「石背国信夫郡」がある時期、陸奥の中心的役割を果たしたことがあったらしいことは推測ができる。

「杉目城」（大仏城・福島城）『市史』

一四一三 大仏城 伊達持宗

一五七七 杉目城 伊達晴宗死去

一五九三 福島城 木村吉晴城代

一六七九 〃 本多忠国城主

現県庁の立っている土地である。

一九七四 渡利村、杉妻村福島市に編入

瀬上村、岡山村、鎌田村、清水村、吉井田村福島市に編入

『信達三郡村誌』（鳥谷野村・地勢）

「全村坦夷寛眩道路四達且つ福島市街に近くして百事便を得然れとも東に逢隈川有り西北に永井川（濁川）有其洪水に遭ふや衝決汎濫の害受るも亦大なり」

という。トヤノ村という一単位をなしている。

その鳥谷野村の東側を流れる阿武隈川は伊達・伊具・巨理を包んで太平洋に向かう。代って鳥谷野村はその西北を永井川（濁川）によって廊される。ここでのワタリ（渡利村）は阿武隈川の東側の地名である。

福島城、二本松城、会津城が落城する。皇化の光王がやってくる。支配と被支配の光と暗の儀礼が行われ、皇敵、賊軍が成立する。

〈武器、財宝は何処に隠した〉

〈見つからないからといって、隠してないとは言えない〉

仮に最後まで見つからなかったとしてもこの征戦は正しいものであったということを忘れるな。大量破壊兵器というのはこの地球上の何処にあるのだろう。

「隠してはいけない。兄弟やお前の罪を告白することを恥じてはならない。私も罪人なのだ。聖グレゴリウスもいわれているように、罪を犯したり、それを隠したりすることは、人間の性ともいうべき過ちなのだ。神はすべてを見守り給うのであるから、心に恥ずることはないし、告解を恐れる必要もないのである。誰にも強制されずに、自分が犯した罪を告白しよう。」

こんな表現を書き移すのは真実つかれる。

五

「トヤの野」。東歌ではトは等の字を使う頻度が多い。ヤは夜の字を使う頻度が多い。それで初句「等夜乃野尔」は「トヤの野に」と訓む。

一九九〇 吾社葉憎毛有目吾屋前之花橋乎見尔波不来鳥屋（末句見には来じトヤ）

「鳥屋」 トリヤートイヤートヤと訓まれたのであろう。

『万葉集釈注』（伊藤） 等夜の野 地名。

今日、秋の渡り鳥を捕えるための山中の小屋を「とや」（鳥屋）という。編者は、「狙はり」との関係で、「等夜の野」をもっと狭い範囲を示す地名と考えたのであろう。

『国語辞典』（講談社学術文庫）

とや（鳥屋・峙） ①鳥小屋 ②タカなどの羽がはえかわること。

——につく ①飼い鳥の羽がぬけかわること ②旅芸人などが、かせぎがなくて宿にこもること。

「トヤ」は大体「鳥小屋」というが、ひなや卵が蛇や他の獣に捕られないため、作業部屋、あるいは厩舎などの天井からつるした薄い箱や筵など、空間に作られた庭鳥などの夜の峙である。「鳥屋・峙」と二様あるのは理がある。

みちのくの信夫の鷹の鳥屋ごもり かりにも知らじ思ふこゝろは

に於て「信夫の鷹の鳥屋ごもり」は信夫山の鷹だから、鷹の峙における羽のぬけかわること。あるいは「狩りにも知

らじ」だから鷹狩の鷹の収容されている鳥屋。そのどちらかに決めることもないのではないか、作者だってそれほど
のことは考えていないかも知れない。

第三句までは狩に出ることもなく鳥屋にこもっている状態。へかせぎがなくて宿にこもる状態である。そこから
「仮にも知らじ思う心は」と連絡しているのである。

「信夫の鷹」も「忍ぶ・偲ぶの鷹」で「信夫郡鳥谷野」とはそれほど関係はないのかも知れない。あるいは「信夫郡
鳥谷野」があつて、中務郷親王の歌が作られたのかも知れない。

万葉集に於いてさえ、現地とは直接関係しないと推定される歌がいくつでもある。

三九六 陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを

三四二六 会津嶺の国をさ遠み逢はなはば偲ひにせもと紐結ばさね

そう思ってみればみちのくの歌などは一つも現地のものではないともみられよう。

「等夜の野」は「鳥屋の野」という意味を含まうとしているわけであるまい。即ち渡り鳥を捕えようとする野ではな
い。としたらトヤの野はとにかく地名であつたらう。

「乎佐芸祢良波里 乎佐乎左毛」の兎狙はり、は「ここまで同音の「をさをさ」を導く序詞」(『万葉集 東歌・防人
歌』(水島)と一般に処理されている)。

しかしここは「等夜の野に兎狙はり」「をさをさも寝なへ」という連用修飾・被修飾の関係ではないか。即ち、
等夜の野に兎狙はり(狙って)をさをさも寝なへヨウニ

をさをさも寝なへ兎ゆゑに母に嘖はえ

という、三・四句重複の序・被序ではないか。

兎は夜、月の光と共に広場に集まってくる。〈兎・兎なに見てはねる、十五夜お月様見てはねる〉

というのは兎の月下乱舞を歌っている。場所はそんなに広くなっている。百米四方もあればいい。真中は人が通る道で地面が固まっているくらいが跳躍には都合がいい。

「兎は昼間から巢の外に出て歩きまわったりはいたしません。」(『カルメル会修道女の対話』ベルナノス)「昔、月が人類に不死の宣託を伝ようとした時、ウサギが使者の役を引き受けた。」(『旧約聖書のフォークロア』第二章)「正しく伝わらなかった神託の物語」(フレーザー)

兎は月よりの使者であった。

「突然、なにかの衝動につき動かされたようにノウサギは走りだした。なわばりの端から端までくりかえし跳ねまわり、大きな後足が雪を蹴るたびに柔らかない雪煙が上った。丘の斜面に棲むすべてのノウサギが同じ衝動につき動かされ、月明かりのタイガはとび跳ねる白いかたまりであふれた。ノウサギはみな、なにかに憑かれたように静寂のなかを疾走していた。このディスプレイは「遊び」でも社会的行動でもなく、ノウサギがタイガで生きぬくために数千年の時間をかけて発達させてきた、通路網を作りなおすための習生だった。」(『極北の動物誌』「ノウサギの世界」ウィリアム・プルーイット)

兎は跳びあがって身をひねる。とびはねる白いかたまりであふれた。

ここではその場がトヤの野という場所であった。その兎を狙っている。捕獲しようと狙っているのである。月明の夜に。つかまえようと狙っているのである。矢でも鉄砲でもない。だから二兎を追うことはない。

〈兎追いし 彼の山〉

兎は追って獲るものであった。

少し前まで、安達太良山、信天山、吾妻山の夜道を歩くとよく兎に会ったものである。「オオヤマネコの一家は隊列を組み、長い脚を高く上げて影から影へ滑るように移動した。行く手にはきらきら輝く開けた雪原が広がっていた。月光のなかを白いものがひらりとよぎった。オオヤマネコは弾むように前進したかと思うと、ふと方向を変えた。別のウサギが視界にとびこんできた。また一匹、こちらからも一匹、あたり一面が、突然、月光を浴びて踏ねまわる白い物体で埋めつくされた。オオヤマネコは座りこみ、じっと見つめつづけた。こんな光景を目にするのは初めてだった。」(右同「待ち伏せの名手」)

オオヤマネコは待ち伏せの名手だった。そして人も。追いつめる。一人よりは、四方に何人か隠れ待ち伏せていた方が効果があった。

近づいて来た兎を追って捕えようとすると、兎は〈脱兎の如く〉逃げるが追いつめられると物陰や穴などに頭を突っ込んでうずくまってしまふ。〈終りは処女の如く〉おとなしく、ふっくりした尻の方は優しい。

「夏休みに訪れた信州の山小屋。……捕まえようとしたら、ぴょんと跳ねて、たまたま置いてあった風呂場で使うプラスチックのスリッパに頭から潜り込んでしまった。

しばらく足をばたつかせていたが、そのうち背を丸めて静かになった。これが安心と思ったのだろうか。まさしく「頭隠して尻隠さず」。何とも可愛らしい。」(04820神奈川新聞「照明灯」)

農民は猟師専門でも漁夫専門でもないから昼間農耕生活して、夜ウサギ捕りに出かけたり、夜突きに川に出かけたりののである。そんな風にしてしか、人は夜に月の冷たさを知るすべはなかつたろう。ウサギを捕って食料にする習慣がなくなると、十五夜お月さんを見て跳ねることもなくなる。月光の冷たさと心というものが融合してみることはない。

兎を狙ってヲサヲサも寝ない、と

ヲサヲサも共寝をしない子、

と〈寝〉が二様の趣きを持っていて、それを口に出す、言葉で言ってみることが面白くて仕方がなかった、心の遊びがとめどなく楽しかったのである。

「寝なへ兎故に母にころはえ」は、

「ろくに寝ていないあの娘のことで母親に叱られて」(『新編古典全集』)

「この歌、全体に明るくおどけたところがある。本来は、兎狩の折などに若者たちのあいだでもてはやされた歌なのであろう。あるいは、また、ある夜の若者たちの集いで披露された失敗談か。母親に締め出された若者の歌は、多くこのような集いで唱われたのであろう。それゆえか、どの歌には湿気がない。(『釈注』)

「かねがねから狙っていた娘を今夜こそものにしようと思んで行ったのだが、娘の母親に見つけられて、大目玉をくらって、ほうほうの体で逃げ帰った男の愚痴で、野趣満々の歌である。」(『全注』水島)

とはいうものの〈本来は、兎狩の折などに若者たちのあいだでもてはやされた歌〉、〈大目玉をくらって、ほうほうの体で逃げ帰った男の愚痴〉なのだろうか。

母が娘を守っているのは東歌の常である。多分それは公的、村落的規範によっている。大きくは国府的、国家的規範に従っている。規範的なものは文化的、国家的なものである。

性的規制、抑止は公的なものに対応している。それは公的なもの、文化の勝利のようにある。多分、性の〈失敗

談〕は公的なもの、權威的なものへの迎合、妥協である。

この迎合、妥協は人を喜ばせる。即ち支配と被支配を構成する言語表現である。へこの歌、全体に明るくおどけたところがある〕のは支配と被支配の關係表現だからであろう。

東歌の歌われた具体的な環境はわからない。

三八〇七 安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

右の歌、伝へて云はく、葛城主、陸奥国に遣はされる時に、国司の祇承、緩急なること異に甚だし。ここに王の意悦びずして、怒りの色面に顯れぬ。飲饌を設けたれど、肯へて宴樂せず。ここに前の采女あり、風流びたる娘子なり。左手に觴を捧げ、右手に水を持ち、王の膝をうちて、この歌を詠む。すなはち王の意解け悦びて、樂飲すること終日なり、といふ。

とあるのは葛城王と陸奥国司の宴席になっているが、一般的には国司と例えば安積郡司との關係である。その時の郡司側の接待が〔緩急〕であれば国司の心は喜ばない状態である。

東歌も基本的には郡司側の接待歌ではなかったか。郡司の妻女もまた接待役である。歌は地方官達の自尊心を尊重するように歌われる。自らを卑下し、滑稽化することもある。

逆轉的表現は結構多い。

三五三一 妹をこそ相見に来しか眉引きの横山辺るの猪なす思へる

恋人に逢いに來た自分をその親が、まるで田畑を荒らす猪のように追い払ったことをいう。(新編古典全集)

三四六一 あげといへかさ寝に逢はなくにま日暮れて夕なは來なに明けぬしだ來る

の「あげといへか」の問いかけのような表現は面白い。漫才的な喚起表現である。

三五二一 鳥とふ大をそ鳥のまさでにも来まさぬ君をころくとそ鳴く

被支配者は光軍に対してどう待遇していいか。グローバル化に抵抗して捕虜になった收容所で、裸にされて棒でつかれたりして、どうしていいか判らない。仕方がないから征服者の好みそうなことを言ってみる。

そして何と征服者の好みというのは人道的に、文明的に、趣味的に優れているのである。要は被征服者は不様であるということである。

六

先に参考までにとあげた、

三五七五 美夜自呂乃 渚可敞尔多弓流

の外にもう一首ある。

三五〇五 うち日さつ美夜能勢川の貌花の恋ひてか寝らむ作夜も今宵も

「美夜能勢川」は所在不明といわれているが、宮の瀬川という風にとれば『万葉地理考』に岩代国信夫郡に宮城村あり、この地にあらざるか、とあるのに寄せてみてもいい。

「すかへ」は「川縁の地」「川沼地又ハ低地の畑」(『全国方言辞典』)。「可保我波奈」は「貌花のことで今の昼顔と思われる。」(『全注』)。

会津地方の盆踊り歌に「一にかっぽう花」「二にかきつばた」「三にさがり藤」「四にししぼたん」と数えて行く歌がある。

とにかく東歌にしては優雅な歌である。以上の三首はこの三五〇五、三五二九、三五七五といずれも未勸国歌、東国边境歌である。国も持たず、作者も持たず懐しい歌である。

愛や恋というのは生活程度の充実度に似ていよう。だから野性的と思われる性表現は被虐的に自己を暴露して上位者に安定感と余裕を与える。滑稽な恋物語は平和な秩序を作り上げる。

〈どんな話をしたらいいか〉落語家がいう。政治と宗教の話はできない。女にふられた話をすればいい。(円蔵)性の失敗談を訛音で、〈和歌〉というものを歌うおかしさ。

占領軍の言語を修得するというのは占領軍の御都合、意向を伺うため以外ではない。この言語は説明・被説明の表現構造しか持たない。全世界が超大国の言語を修得するのは説明を受ける能力を身につけるため。

東歌の歌われた儀礼の場がそうした幫間歌を求めていたのかも知れない。

三八〇七 安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が念はなくにはそうした場での典型的な歌であろう。